松村通信第１０６号

2020 年 3 月 3 日
松村勝弘

東洋発の普遍性

新型コロナウィルス蔓延　新型コロナウィルスが猛威を振るっている。政府はその蔓延を防ぎ切れていない。重症・死者がどれくらいになるかが最大の問題だろう。オリンピックどころではない。GDP はマイナスになろうとしている。政権は末期症状を呈している。このような感染症が世界的に拡大する背景にはグローバル化がある。前号で問題にした資本のグローバルな進出が経済の不安定化をもたらしたと同様、今回は健康や生活への不安を拡大している。グローバル化を単純に進歩と考える西欧の近代化論・進化論的な考え方が限界に来ていることの一つの表れが今回の新型コロナウィルス騒動であり、2008 年のリーマン・ショックなのかもしれない。

西洋の文明と東洋の文明　西洋の文明と日中を含む東洋の文明を比較してみたいと思う。西洋はキリスト教という一神教のもとで文明を築いてきたが、とりわけルネッサンス以後啓蒙思想が台頭し、ニーチェが言うように「神は死んだ」はずだった。しかし、結局は人間が神の地位に取って代わり、人間の傲慢さが目立つようになった。

「道徳の根拠を社会規範に見いだすアリストテレス哲学においても、神に根拠を投影するキリスト教思想においても、個人の意志と外因との関係は切実な問題にならなかった。前者にとって、意志や行動が社会の影響を受けるのは当然である。後者にとっても各人の属性・人格が神の摂理に適合するかどうかが善悪の判断基準であり、個人の内的要素がどう形成されるかは重要でない。

社会規範に善悪の基準を据える古代ギリシアと近代は袂を分かち、キリスト教と同じように、各文化・時代の偶有条件に左右されない普遍的根拠によって善悪を基礎づけようと試みる。だが、神という超越的権威にもはや依拠できない近代人は袋小路に迷い込む。社会あるいは神という外部に根拠を投影しなければ、根拠は個人に内在化されざるをえない。」（小坂井敏晶『神の亡霊 近代という物語』東京大学出版会、2018 年 3 頁）

「伝統社会の秩序を根拠づける神なる＜外部＞は、共同体の人々にとっても外部の超越的存在として感知される。対して近代社会を支える＜外部＞は、市場・法体系のように社会内部の制度として位置づけられる。」（小坂井敏晶『増補責任という虚構』ちくま学芸文庫、2020 年、338 頁）「アダム・スミスの場合は、市民が自由に取り結ぶ関係から生み出される不動点が、『見えざる手』なる＜外部＞として機能する。」（小坂井[2020]339 頁）ここに市場に振り回されている現代経済学を見ることができる。

かつて 1997 年の山一證券倒産に際して、大蔵省（三塚大臣、長野証券局長）が言った言葉を思い出す。「山一証券に日銀特融を実施した六五年のときと違い、今回はなぜ救済しなかったのか」という記者の質問に答えて、「市場が山一に対し宣告したのだと思う」と答えている（『日本経済新聞』1997 年 12 月 25 日号）。当局の責任を棚に上げて、「市場は神の声」だとばかりに傲慢に言い放ったのであった。多くの日本人はこれに違和感を持ったに違いない。東洋の文明に育った日本人には西洋の文明で育まれた経済学の論理を受け入れることができなかったのではなかろうか。

西欧による傲慢な植民地支配　西欧近代化論の問題性は 19 世紀および 20 世紀前半のヨーロッパ諸国の植民地主義に典型的にみられる。中国がアヘン戦争以来これに苦しめられたことは周知のところである。西欧は遅れたアジア・アフリカを、いわば子供に見立てて、子供を育てるが如く遅れた国々を発展させる義務があるという傲慢さで植民地政策を進めた。

通常啓蒙主義が近代化をもたらしたと理解されている。しかしその負の側面が忘れ去られている。「啓蒙主義は人類の単一性を、したがって価値に関する普遍性を肯定した。優れた価値の保有者たることを自認していたヨーロッパ諸国は、自分たちの文明を。自分よりもその恩恵に浴していない人々にもたらすことが許されると信じた。こうした企図の成功を確かめるために、そういう人々が住んでいた領土をかれらは占拠しなければならなかった……。」（ツヴェタン・トドロフ、石川光一訳『啓蒙の精神』法政大学出版局、2008

年、23 頁）傲慢にも世界を啓蒙するのがヨーロッパ人の任務だと考えて、植民地政策を推し進めた。17 世紀の啓蒙思想家・政治家「コンドルセは文明化された国民には一個の使命、知識の光を万人にもたらす使命が課せられていると確信していた。『ヨーロッパ人は、[……]今なお広大な国々を占めている野蛮な国民たちを文明化しなければならず、さもなければ征服せずに消滅させねばならないのではないだろうか』。コンドルセが夢見たのは均質な世界国家の建設であり、ヨーロッパ人の発言がそこでリードするであろうと、彼は考えた。」（24 頁）

なんと傲慢なのであろうか。実はマルクスも例外ではなかった。かれはイギリスのインド植民政策をインド近代化のために肯定されると考えていたことがわかる（カール・マルクス（1853a）「イギリスのインド支配」（1853b）「東インド会社－その歴史と成果」（1853c）「イギリスのインド支配の将来の結果」いずれも大月書店版『マルクスエンゲルス全集』第 9 巻（1962）所収）。

自然科学における西欧の傲慢　他面ではそのような考えの下で自然科学から社会科学にまで近代科学を発展させた。しかし、その根底に神に代わった人間の傲慢さがついて回っている。原子力発電所などその典型だろう。放射性廃棄物の処理法が確立されていないのに、どんどん発電所を作り、ついに福島のような事故も起こった。人間は自然をすべてコントロールできるという思い上がりがもたらした事件ではなかったか。近年の地球温暖化もそのような文明の負の側面ではないか。西欧近代は自然を人間が征服すべき対象と考えている。最近の新型コロナウィルスの例を見てもわかるように、人類は疫病を克服できていないのである。西欧近代は自然との共存共栄を図ろうとする東洋的知恵に欠けている。

社会科学における西欧の傲慢　社会科学、とりわけ経済学においても新古典派経済学が風靡し、市場万能、さらには金融資本主義が広まった。このような経済学が前提している考え方は、いわゆる「合理的経済人モデル」である。人間は経済的に合理的に行動すると仮定する。世の中は法則通りに動くと考える。そうしないと数式に落とし込めないからである。合理的に利潤を追求する人間が形成する市場がすべてを決めてくれると考える。いわゆる「見えざる手」がまさに「神の手」として人間を導いてくれると考える。人間はその市場に聞いていれば良い、従っていれば良い、結果は収まるところに収まると考える。しかし実際の人間はきわめて不合理な行動をする。その結果がリーマン・ショックであった。リーマン・ショックがなぜ生じたのかを新古典派経済学は説明できない。人間は合理的ではないからだが、合理的経済人モデルで考えてきた経済学では説明がつかない。まさに西洋文明は行き詰まっている。

謙虚な東洋思想に基づく経営　しかし、東洋の思想は西洋のような傲慢さをもっていない。孔子の『論語』をひもとくと、仁徳を重視し、謙虚であれ、学習を続けよと言っている。

我々は経済学ではなく、経営学の立場から世の中を見ていこう。経営学の立場から世の中を見れば、決して法則通りに動くものでないことがよくわかる。偶然の連続である。経営者はそのような見通し困難な世の中で意思決定をしなければならない。経済学を基礎として経営を考える人たちは将来を計算して意思決定すべきだという。実際は将来は計算できない。経営者の意思決定は「えいやっ」の連続である。結果オーライの世界である。しかし経営者にせよ従業員にせよ、向こう見ずに意思決定して良いというものではない。そのために必要なのは経験である。かつてセブン-イレブンの鈴木敏文氏が仮説検証といっていたが、何らかの仮説を立てて実践し、結果を検証すべしといっていた。そういう経験を何度もするうちに、「勘」が身につく。もちろんそのためには日々学習を続けなければならない。世の中から学ばなければならない。

前述のように、孔子は学習を続けよといっている。我々は、このような東洋の文明を基礎に、行き詰まった西洋近代を乗り越える、新たな地平を築かなければならないと思う。西洋発の「普遍性」にかわる東洋発の真の普遍性を確立しなければならないと思う。ただしそこでの普遍は、硬直的な西欧的普遍ではない。柔軟なものでなければならないだろう。

改めて言おう。そのためにこそ、経験を積み重ね、孔子の言うように学習を続けていかなければならないと思う。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。